狭山の元気　発見

躍

いきいき狭山人

同じ目標に向かって進む仲間と共有するひとときは素晴らしい

博物館ボランティアの本格的な活動が始まったのは、昨年夏の企画展「さわってあそぼう！木のおもちゃ」がきっかけでした。これは文字どおり、木のぬくもりを実際に触って感じてもらうのがテーマで、目の不自由な方も楽しめるよう、援助や解説をするボランティアを募りました。そのボランティアが今では、博物館にとって欠かせない存在になっています。

現在、ボランティアとして博物館をサポートするのは約20名で、企画展の準備や来館者への展示案内などが主な活動です。それぞれが自分の都合に合わせ、自分にできる範囲で博物館とかかわっています。お互いに、博物館で過ごすとき以外の顔…住所や職業など知らないこともたくさんあるそうですが、一緒に活動する時間は明るく和気あいあいとした雰囲気が溢れています。

そんな皆さんが夏の企画展終了後から準備をしてきたのが、6月13日まで開催している春期企画展「永久の眠り今（狭山の古墳）」です。この企画展は、狭山の古墳時代を最新の発掘成果に基づいて分かりやすく紹介するもので、発掘した土器や金属製品のほか、古墳内部のようすや古代人を再現した13体の人形など、狭山の古代に思いを馳せる数々の展示品が飾られています。実は、これらの展示品のほとんどが、ボランティアの皆さんによる手作りです。設計図を見て作るとはいえ、一度も手にしたことがない物ばかりを試行錯誤の中、たくさんの手間と時間をかけて完成させました。しかも、材料の9割はリサイクル品。ボランティアの皆さんが資源を甦えらせたのです。とは言っても、博物館の展示品となれば質を落とすことはできません。その「人に見てもらう」ことが緊張感と励みになったそうです。そんな厳しくシビアな面に加え、同じ目標へ向かう仲間がいる充実感が、皆さんを作業に没頭させました。どの作品も狭山の古代を見事に語っています。

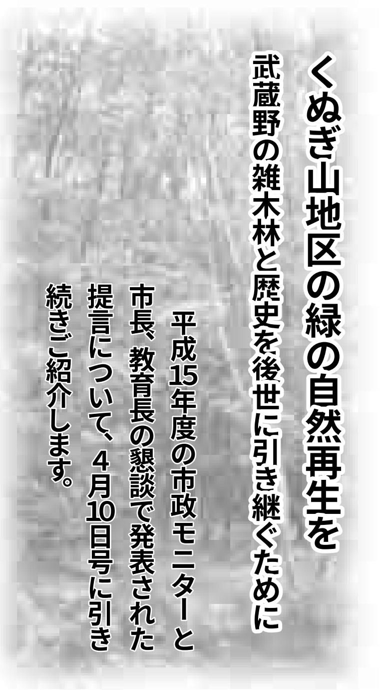
誰かのためだけではなく、博物館ボランティアとしての生きがいを見い出し、活動している皆さん。この気持ちでつながる「和」が、博物館を訪れる人を優しい雰囲気で迎えてくれるのが伝わります。「狭山の古代の原点を自分たちの手で紹介したかったんです」…そう語る皆さんの思いがたくさん詰まった企画展。ぜひご覧ください。まだ知らない「古代の狭山」に必ず出会えるはずです。

博物館ボランティア

みんなで知恵を出し合いながら進める作業
一緒に新しい挑戦を重ねていくことで
絆がさらに強く・太くなるのが分かります

オピニオン声

皆さんの「声」をお寄せください。



くぬぎ山地区の緑の自然再生を

武蔵野の雑木林と歴史を後世に引き継ぐために

平成15年度の市政モニターと市長、教育長の懇談で発表された提言について、4月10日号に引き続きご紹介します。

江戸時代中期から開拓されたくぬぎ山地区は、狭山の緑を代表する武蔵野の雑木林として、昔から多くの人に親しまれてきました。しかし、くぬぎ山地区の周辺でダイオキシン類が検出され、重大な社会問題として注目されたのは誰もが知る事実です。その後、市がくぬぎ山地区の環境対策を重点施策として位置付け、組織を編成して独自の排出抑制値を定めるなど取り組んだ結果、市民の不安が取り除かれたことは評価できます。しかし、今では事業そのものが国や県の施策となり、時間が経過するにつれて行政や市民の意識が薄らいできたように私たちの目には映るのです。

大きな社会問題に発展したくぬぎ山地区とその周辺への意識を風化させないためにも、自然再生事業が推進され、緑の保全が実践されているフィールドを市民や子ども達への教育の場として活用しながら、環境教育を進める必要があると考えます。自然と人との関わりを理解することで環境や自然に対する思いやりの心が育(はぐく)まれ、よりよい環境の創造を目指す意識が養われるはずです。また、市はそれらを実現するために、さやま環境市民ネットワークや各種団体と連携しながら、「市民の力」を活用していくことが重要と考えます。

人と共存し、長い年月をかけて培われた武蔵野の雑木林と歴史を後世に引き継ぐため、あらゆる機会を通じた環境教育の充実を願っています。

市の考え方

くぬぎ山地区の変遷は、人と自然環境の共生を考える上で欠くことのできない教訓が凝縮されています。この経験を活かしながら、くぬぎ山をはじめ、市内に点在する貴重な緑を保全し、次世代へ自然の尊さを継承していくことが市の責務と考えます。いただいたご提案を踏まえ、関係各機関とも連携しながら、あらゆる機会を通じて環境教育を実践し、市民との協働体制の確立に努めていきます。

好きな言葉　**心**

日本人の精神を象徴しているから

Nathan Prestidge

ネイスン・プレスチージ

（西中学校勤務）

- **ニュージーランド出身**
- **今年の4月から狭山市のALTとして勤務**
- **ラグビーが大好きでフランスのプロリーグや日本の社会人リーグでプレーしました**

Assistant Language Teacher

Living overseas has been a great experience for me. I started off moving to Australia (Sydney) when I was twenty-spending two years playing rugby and working in a bank.
From there I moved to France (Nice)
where I spent five years playing rugby in the French pro league. While in France I visited many places, the beer festival in Munich, the running of the bulls in Pampalona, and the wild party, island of Ibiza.

I then moved to Japan where I spent two years working in Sapporo. From Sapporo I relocated to Tokyo where I played two seasons with a Shakaijin league rugby team. At present I'm teaching at Nishi junior high school and amreally loving it! I love Japan and hope to stay a long time! See you around.

海外生活は私にとってすばらしい経験です。20歳で行ったシドニーから始まり、そこでは銀行で働きながらラグビーをして2年間過ごしました。その後フランスのニースに移り、5年間プロリーグでラグビーをしました。在住中は、ミュンヘンのビール祭りやスペインのパンプローナの牛追い祭り、同じくイビザの島のパーティなどを楽しみました。

フランス在住後、札幌に移りました。それから東京に移り住み、2シーズンの間、社会人ラグビーリーグに在籍しました。現在は西中学校で英語を教えていますが、とても気に入っています。日本が大好きなので、長く滞在したいと思っています。

（英文の要約）